

### 三、「内臓が生み出す許々呂」

西原克成 会長

もののこころとは物の本質のことを言う。脳科学と唯脳論なるものがひと頃はやったことがある。高等動物の心も脳も身体のしくみもすべては腸（内臓）から生まれるから、このはやり論は本質つまりこころの抜けた身体論といえよう。日本の古語では「こころ」とは、内臓や胎児のことをあらわす。万葉集の憶良の神功皇后に関する歌に「御許々呂（みこころ）をしずめたもう」とある。この「みこころ」とは御腹内であり懐すなわち御胎児で胎児のことである。枕詞の肝向う心、むら肝の心とは肝が群がり向いあっている動物の腹のうちを言う。古来からやまとことばは、内臓脳からあみ出されていたのである。賦に落ちるとはこのことである。

サイエンスの源はことばである。内臓脳で考えることがこれからの医学と生命科学には肝要である。こころの源は大和言葉が示すごとく内臓にあり脳にあるのではない。わが脊椎動物の源であり顔の源である口と鰓と腸管の袋のホヤの体制を見れば、ホヤの球体のオモテの右半分、半球一杯に鰓のある口腔内に脳のオリジンとなる大きな内臓脳の源の脳下垂体があり、この口腔に細い食道がウラの左半球に続き太い胃腸が左半球を曲折して肛門へとつながる。ホヤの鰓が酸素を欲し腸が食物を欲してうずくのが心のはじまりである。高等生命体は腸からはじまり脳も腸の筋肉からはじまる。動物には体を覆う筋肉と胃腸腸内臓筋がある。狩の獲物の獣の腹の内臓筋は“こごる”ごとくに動くので古人はこれを生命のこころと呼び心の源としたのである。内臓の本義（本質＝こころ）はエネルギーや体の細胞の源となる食物の消化吸収による生命維持とその増進にある。この究極は食べたものから得られた余った栄養の生植物質によって、次代の生命を継ぐことつまり自己の再生であり、これが肉体的自己実現であり生殖活動である。これらが生命の本義すなわちいのちのこころであり、ひとにはこれとは別にそれぞれに様々な生きがい、つまり生きるこころの拠り所がある。多くの場合これは“仕事”と呼ばれる芸術活動や医術・医業、文芸・文学等の創造活動である。ヒトのこころの産物の創作活動が精神的自己実現であるから生物学的自己実現の生殖活動に極めて近似しているのである。だから偉大なる芸術家は、常に内臓感覚を研ぎ澄ましているのである。

今日の基督教に基づいた西洋文明において、医術はあらぬ方向に進み臓器移植医学がはやっている。これにより「こころ」や魂という体温と同等のエネルギーを生ぜしめる臓物が何者であるかを実験することが出来るのである。心臓と肺は一つのユニットであり肺が鰓腸の内臓腸管系であり、心臓が鰓と肺と全身に血液を送るユニットであるから心肺移植によりドナーのこころや記憶が驚くほど生き生きと被移植者（レシピエント）の夢の中に蘇るのである。まさに「内臓が生み出すこころ」の検証を文明国ではいたるところで人体実験をしている真っ最中である。中国では死刑囚の心臓、肺や腎臓を移植するそうだが、犯罪

者や色情狂を野に放つようなものである。自己実現のすべては腹で行われるから腹を鍛えることが大事。自己実現に失敗した時に怒りをしずめる武人のたしなみがハラキリである。大和魂はすべて内臓脳思考法による。ともに内臓の作り出す生命エネルギーにその源がある。

#### 医術・芸術・文芸と顔とこころからだと精神について

生命の躍動するこころの軌跡の生活歴を記すのが文学である。その文学にもノーベル文学賞なるものがある。

この賞を受けたヘミングウェイは、「21世紀の文学」について原稿を依頼された時に「ふん！21世紀の文学を語るとこんな多額の金をもらえるのか！」と言って金を受け取って、締め切りの期限がすぎても何も書かずにいて、しばらくしてから自殺してしまった。川端康成先生もこの賞を受けた時、明恵上人の歌「あかあかやあかあかあかやあかあかや！あかやあかあかあかあやや月」という歌を受賞講演でご披露されてからしばし時を経て忘れられた頃に、女性問題が明るみにでそうになって自殺された。三島由紀夫先生は、この賞の候補となっただけで、割腹自殺された。おしむらくは割腹の作法が男の美学によるハラキリではなくて、上意から刑罰として賜る切腹の作法であった。勉強不足でなんともさまにならんだ。ノーベル文学賞に関係する文学者なるものが、このように躍動するこころとは正反対の生きざまなのはなぜだろうか？とも思って見たが、こんなことは考えるだけで無駄と思われたのでやめた。

油壺セミナーの行われる三浦三崎の地についてを話そう。途中の三浦海岸からゆるやかな坂を登ると小高い平地に出る。この地は昔は一面の畑だったところ。今は“まほろば”と呼ばれるマンション群のある有名地。

「大和はくにのまほろば、たたなおくあおがき山ごもれるやまとしうるわし」のごとき地なのである。

城が島には「雨はふるふる城が島の磯に」で有名な北原白秋の碑がある。白秋がこの地に落人のごとく逃げて来た時の歌が

「悲しきは人間の道ヒトヤ道馬車のきしみて行くこいし礫道」

口側の腸（総腸）の活躍で詩歌のたくみな詩人も、肛側の鯡腸（生殖の腸）のうすぎでしばしばつまづくのである。

この地は家康の家臣となって三浦安針と呼ばれたイギリス人のウィリアムアダムスの領地だったので、江戸時代から英米となじみの深いところ。ヨコスカには安針塚がある。安針とはパイロットのことで、そのお墓が桜の名所の公園となっている。この半島の相模湾側には鎌倉があるから、万葉風の歌を沢山作った右大臣実朝の金槐和歌集がある。彼は沢山のこころの歌や心象をうたって

いる。

わがこころいかんせよとか山吹のうつろう花に嵐立つ見ん

山吹には、万葉の高市皇子の挽歌がある。

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

山吹は黄泉への手向けの花である。

たまくしげはこねの御湖 <sup>みうみ</sup> <sup>け</sup> <sup>けれ</sup> KÖKÖRÖ あれや二国かけてなかにたゆとう

この頃のこの地では「こころ」は、前のことばのみうみの音便でこが KÖ になるのである。みの発音のあとにコと言ってみれば、KÖの方が言いやすいのがわかる。たまくしげとは箱につく枕ことば、たまが魂で奇しげは不思議である。「魂を入れる不思議な箱」という枕ことばをつけて箱根の地のこころを歌っているのです。

春はまず若葉つまんと占めおきし野辺とは見えず雪のふれば

くれないの千しおのまふり山の端に日の入る時の空にぞありける。

時によりすぐれば民のうれいなり八幡龍王雨止めたまえ

神といひほとけと言ふも世の中の人のおころのほかのものは

ほのほのみ虚空に満てる阿鼻地獄行へもなしと言うもかなしき

いとほしや 見るに涙もとどまらず 親もなき子の母をたづぬる

物いはぬ四方のけだものすらだにも哀れなるかなや親の子を思ふ

には惨い母親政子への絶望と嘆きがにじみ出ている

荒海のいそもとどろによする波われてくだけでさけてちるかも

春と来て夏とすぐして秋風の吹き上げの浜に冬は来にけり

彼は一年中何もすることが無かった事をなげくごとくの歌が沢山ある。

時はうつり蕪村の「北寿老仙をいたむ」（晋我追悼の曲）の俳詩と言われるころの歌がある。

君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に  
何ぞはるかなる

君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ  
をかのべ何ぞかくかなしき

蒲公の黄に 薺のしろう咲たる  
見る人ぞなき

雉子のあるかひたなきに鳴を聞ば  
友ありき河をへだてゝ住にき

へげのけぶりのはと打ちれば西吹風の  
はげしくて小竹原眞すげはら  
のがるべきかたぞなき

友ありき河をへだてゝ住にきけふは  
ほろゝともなかぬ

君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に  
何ぞはるかなる

我庵のあみだ仏ともし火もものせず  
花もまいらせずすごすとイめる今宵は  
ことにたうとき

この俳詩はまるで明治時代の島崎藤村の新しい詩歌の曙のごとくです。  
萩原朔太郎は「郷愁の詩人と謝蕪村」で晋我追悼の曲として俳詩を取り上げ論じている。